

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	奈良女子大学
申請者氏名	松田 登紀
分担者氏名	辻岡 美希、鎌内 菜穂、穴戸 佳央理
研究課題名	乳幼児教育施設における保護者参画型研修の構築

表1 本園における保護者参画型研修として創出した実践活動一覧

実践活動	実施時期・回数	対象
①おしゃべりひろば (2025年度)	6月～2月 (5回)	本園保護者・本大学附属中等教育学校保護者(参加希望者)
②教養講座(2025年度)	9月/11月 (2回)	本園PTA役員及び保護者 (参加希望者)
③保育参加・ともにラウンドテーブル(2026年度)	5月/6月 (4回)	本園全保護者

表1 本園における保護者参画型研修として創出した実践活動一覧

【研究の概要】

本実践活動では、乳幼児教育施設を拠点に、保護者・子ども・保育実践者がともに学び合う場を構築するため、「おしゃべりひろば」、PTAと協働した教養講座、保育参加後に語り合う「ともにラウンドテーブル」を実施するとともに、地域への波及可能性を探るべく自治体関係者や多様な施設類型の実践者との対話を行なった。その結果、保育参加及び「ともにラウンドテーブル」は、保護者が子どもの生活世界に身を置き、他の保護者や保育実践者との対話を通して、子ども理解や自らの教育観を捉え直す保護者参画型研修として機能する可能性が示された。そのためには、保護者を支援される存在や保育実践の補助者ではなく、異なる経験や視点をもつ学びの主体として迎える場の構成が必要である。また、こうした実践は一つのモデルとして他園に適用するのではなく、各園の施設類型、地域性、組織文化、保護者との関係性を踏まえ、対話的に構築する必要がある。また地域や施設類型を越えた実践者同士の対話は、自園の前提を自覚し、新たな保護者参画のあり方を想像する機会となることも示唆された。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

（1）研究の目的

本実践活動は、乳幼児教育施設を拠点とした「保護者と子ども、保育実践者がともに学び合う場」としての保護者参画型研修「ともにラウンドテーブル」の創出と、その地域社会への波及可能性を探ることを目的とした。ここでは、子育てという営みが乳幼児教育施設から「支援されるもの」であるという一方向的な構図から脱し、子どもも保護者も実践者も互いにケアし合いながら学び合う関係性を築くこと、そしてその過程を支える場としての乳幼児教育施設の役割を再考するものであった。また本実践活動では、子どもの生活を取り巻く現代的な課題についても、多様な立場を越境し、それぞれが主体としてともに考える、新たな地域教育のあり方を探った。加えて、保育・教育実践者、保護者が立場を越えて対話し、子育て・教育の担い手としてともに学ぶ場をつくることにより、女性の活躍について経済的側面だけでなく、市民としての実践として捉え直す視座を提示するとともに、本研究を通して乳幼児教育施設が家庭や地域と連携し、教育・福祉・文化をつなぐ場となる可能性を探ることを目標とした。

（2）実践活動内容

○本園の理念「ともにあるということ」の実質化

本研究の前提として、奈良女子大学附属幼稚園においては、幼児教育や保育・子育てなどの「正解」を示す縦型課題解決モデルから、子どもや保護者らとともに意味と価値を生成する実践へと転換している。具体的には、大学附属幼稚園として、従来の「よりよい保育の正解を示すモデル」の役割を担ってきた実践から、「市民としての子ども・大人はどうありたいのか」を問い、対話と省察を通して意味と価値を生成する実践を大切にしている幼稚園へと地平を再定位置してきたのである。その根底には教育理念「ともにあるということ」があり、子ども、保護者、実践者を一人の市民として捉え、固定的な関係性を越えて学び合う共同体の形成を目指している。本研究は、この理念の実質化について探究した一つの実践活動である。

上記の理念を踏まえ実施した、1）本園において保護者参画型研修として創出した実践活動、及び2）地域社会への波及可能性を探る実践活動、は以下の通りである。

1）本園において保護者参画型研修として創出した実践活動

① おしゃべりひろば（園主催）

テーマを設定し、少人数のグループで実践者と保護者、異校種（本大学附属中等教育学校）の保護者が対等な立場で話せる場、として保育時間中に時間と場を設定した。保護者が子育ての不安や葛藤を一人で抱え込むのではなく、小グループでの対話を通して、互いの考えを尊重し、唯一の正解に回収されない語りを保障することで、心理的安堵と自己省察を促し、保護者が一人の市民として自らの考えを見つめ直す機会となることを大切にした。

② 教養講座（PTA主催）

PTA役員である保護者自身が、ワークショップを含む対話の場を保護者向け講座として企画・デザインした。本研究で取り上げた2025年度実施の教養講座（全2回）は、従来の外部講師による講演形式から、園内の実践者と保護者が協働して企画する形へと転換した。特に2回目の教養講座では、ドングリと向き合うワークショップを通して、参加者が「親」や「母」という役割を一時的に離れ、「私」としての感覚をひらいた上で、子どもの声をきくことについて学び合う場とした。

③ 保育参加及び「ともにラウンドテーブル」（園主催）

本園保護者全員を対象に、各日6名程度の保護者が保育実践に参加した後、担任教師も交えて保育の場に身を置き感じ考えたことについて言葉にして語り合う「ともにラウンドテーブル」を実施した。実施前には保護者が保育参加及び「ともにラウンドテーブル」に身を置くにあたり、子どもと保護者の立ち位置について揺さぶり、互いに市民としての実践の場となるよう、資料及び動画を作成した。その内容は、保育参加をする大人は、子どもの遊びや実践について「教えること」「正解に近づけること」のために保育参加をするのではなく、子ども自身が一人の市民として何と向き合いどのように環境とかわろうとしているのか、そのプロセスについて、保護者も子どもの実践の世界に身を置いて感じ考える存在となることについて提案するものである。こうして保護者自身が常に「親」である社会的役割から子どもや幼児教育施設での実践を捉える視角を揺らかし、「ともにある」という地平が耕せるようにした。

保育参加の際には、保護者に実践者の「補助者」として実践者の専門性や方法を実践してもらうのではなく、保護者自身が一人の人としてその場に身を置いて経験したこと、感じ考え、学んだことを対話の場で語ってもらえるよう、担任である実践者は、保育実践の意図をあえて事前に説明せず、保護者自身の感覚や視点から参加してもらった。

「ともにラウンドテーブル」の際には、担任教師がファシリテーターの役を担い、30分程度の対話の場を構築した。本園における研修で大切にしている9つの価値である「尊重」「異質な他者」「語り」「少人数」「心理的安全性」「ネガティブケイパビリティ」「まとめない」「『正解』を見出さない」「自分はどうか、自分を知る」を意識し、「担任教師」と「保護者」という社会的役割を越えてそれぞれが自らの声を生成できるようにした。中には、保育実践の場に身を置いたことにより、気候変動やグローバル化による生物多様性への影響が子どもの世界にもたらすことやYouTube視聴についてなど、現代的な課題についても話題として立ち上がり、参加者同士で対話することもあった。

2）地域社会への波及可能性を探る実践活動

① 互いの実践場に身を置き対話する

本研究には2つの自治体関係者及び公立幼稚園（2園）、公立保育所（1園）、私立こども園（1園）、国立幼稚園（2園）、国立こども園（1園）の実践者にご協力いただき、「保護者と子ども、保育実践者がともに学び合う場」の構築についての地域社会への波及可能性について、互いの実践場に身を置き対話及び意見交換を行った。また、「ともにラウンドテーブル」では、研究協力者である実践者自身が、「ともにある」という地平に立ち、保護者や子どもと「ともにある」対話の場をそれぞれの現場で構築していく主体となることが重要である。そのため、「実践研究福井ラウンドテーブル」という多様な立場や経験を介してそれぞれの世界をお互いの言葉で伝え合い問い直す場に研究協力者に参加してもらい、社会的役割を越えて互いに学び合う感覚を身をもって得た後、対話及び意見交換を行った。

②地域自治体および共同研究提携園とのオンライン対話の場の構築

上記の研究協力者と実際に対面にて関係構築したのち、オンラインにて対話及び意見交換を行った（3月及び6月）。

（3）成果及び実践活動実施上の課題

上記実践活動の成果について、1）については事後アンケートの自由記述を意味内容ごとに整理・検討し、共通して見られた観点を抽出して得られた知見、2）については対話について文字起こしをした記録を意味内容ごとに整理・検討し、見られた観点を抽出して得られた知見である。なお、引用文は意味を変えない範囲で表記を整えた。また倫理的配慮として、保護者には書面にて、研究協力者には口頭にて研究に関わる承諾を得ている。また、個別の記述については個人が特定されないように配慮した。

1）本園において実際に保護者参画型研修として創出した実践活動より得られた知見

①おしゃべりひろば（園主催）及び教養講座（育友会主催）参加による保護者の主体的な学びの現れ

本園で実施した「おしゃべりひろば」および「教養講座」の事後アンケートをもとに、保護者の意識にどのような主体的な学びの現れが見られたかを分析した。

○心理的な安堵と語れる関係の形成

保護者が家庭内で抱え込みがちな悩みや違和感を、他者との関係の中で語り直していることが明らかになった。参加者は、正解を求めるのではなく、自分の考えを聞いてもらい、受け止められる経験を通して心理的な安堵を得ていた。また、日常の子どもの送迎時には保護者同士では語りにくい子育ての背景にある価値観に関わる内容も、安全な場の中では言葉にすることが可能となっていた。これにより、保護者は支援を受ける存在にとどまらず、自ら語り、省察する関係的存在として立ち現れていた。

○価値観の揺らぎを通じた自己理解と「子ども」の捉え直し

事後アンケートからは、保護者が「親」「母」「父」といった社会的役割から一時的に離れ、一人の人間として自分が何を感じ考えているのかに気づく過程が見られた。特に教養講座では、ドングリと向き合う身体的なワークショップを通して、参加者が「私」として対象に出会い直す時間を設けたことで、没頭する楽しさだけでなく、「何をしてもいいかわからない」「他者に伝わるものを作ろうとしてしまう」といった戸惑いや葛藤も語られた。これらは、単なる否定的感情ではなく、日常の中で無自覚に身につけていた自分自身の価値観や振る舞いに気づく契機となっていた。また、他者の声に触れることにより、自分の当たり前が相対化され、子どもを大人の基準で先回りして捉えていたことや、成長や適応を当然視していたことへの気づきも見られた。自己理解は常に肯定的な経験として進むのではなく、違和感や揺らぎを伴うプロセスである。しかしその揺らぎを安心して語り、他者との対話の中で言語化することにより、保護者は子どもを自分とは異なる他者として捉え直していた。このことは、「子育て支援」という「支援する/される」という固定的な関係性の中では相似的に強化されてしまう「親」と「子ども」という関係性ではなく、対等で異質な他者である一人の市民としての「子ども」として理解しようとする民主的な実践として捉えることができるのではないかと考えられる。

②保育参加及び「ともにラウンドテーブル」（園主催）

保育参加及び「ともにラウンドテーブル」実施後の事後アンケートをもとに、本実践活動が保護者にとってどのように意味づいたのかを分析したところ、以下の5つの観点が見出された。

○子ども理解の再構成

第一に、保護者は「挙手をして積極的に活動へ参加しようとする姿が見られ、自分から関わろうとする気持ちの成長を感じました」「自分から声かけできるようになっていること、クラスの中で自分の希望をちゃんと言えり」など、学級全体の関係性の中での子どもの姿を捉えていた。また、子どもたち一人ひとりが学級の一員として互いを認め合いながら過ごしていることに関わる記述など、学級というコミュニティにおいて仲間との関係性の育ちや変容についての気づきも見られた。これらのことから保護者は、家庭では見えにくい子どもの保育実践の場での姿を発見し、自らの子ども理解を再構成していたと考えられる。

○保育実践への理解

第二に、保護者は「子どもたちが何に対して面白く、楽しいと思っているのかを知ることができ、大人とは違う視点をもっていることに改めて気付かされました」「熱中していることを中断しなければいけない時に、子どもは思っているよりも我慢をし、心に折り合いをつけているのだと思いました」という記述からは、保育参加及び対話によって、子どもの行動を大人の基準で評価するのではなく、子どもの視点から捉えようとする契機となっていたことを示している。これらの気づきが、保育実践における環境構成や片付けの時間幅の背景など、実践者の援助や環境構成の意味についての理解につながったのではないかと考えられる。

○参観者から参加者への変化

第三に、「（私は）道具一つひとつ子どもたちに聞いて使って遊んでいました。参観とは違う感じで参加できたことが新鮮でした」「視点がかわることで見え方、感じ方が変わり新たな気づきにつながるの面白かったです」といなど、保護者自身が外側から子どもたちの実践を観察する参観者ではなく、一人の人として園児たちの実践の中に身を置く経験をしていたことがうかがえた。「大人目線ではなく関わると、子ども特有の困ったな、といつも大人が感じる姿にも、特に問題に感じないことも、子ども目線だと困ったなと思うことと両方あったように思います」などの記述からは、保護者自身が「親」という役割の視点から見えることと一人の参加者として子どもたちの生活世界に迎え入れられた場で感じ考えることには差異があることを示している。

○対話による視点の拡張

第四に、「ともにラウンドテーブル」での対話の場では、他の保護者の語りを聞くことによって、保護者自身の視点が拡張されていた。「話を聞く中で悩みの種になっていることも、その子の個性や育ちの一つの姿なのかもしれないと思いました」など、自分の個別な経験だけでは悩みとなりがちでネガティブな子どもの行動についてポジティブに捉えようとしていることがうかがえた。また「自分では気づかなかったことなどを聞くことができる」「子どもたちが自分の場所として生活しているという意見を聞いて、皆さん同じように感じられていて、また驚いておられるところも同じ感覚なんだろうなと思う」と、同じ目線で子どもを見ておられる保護者の方と同じクラスでいられていることが嬉しく思いました」と、保護者自身も仲間意識を感じられる安心を感じていることがうかがえた。

○自らの関わり方への省察

最後に、「親の先入観で子どもが楽しんでいるのか楽しんでいないのかを判断できないという話が出ました」「保護者の方それぞれで目線が異なることが新たな気づきだった。私自身も、家での子どもとの接し方と幼稚園での接し方は同じようにしようと思っただけでも、周囲の子ども達を見ると自ずと接し方が変わっている自分に驚いた。非常に良い経験となった」との記述が示すように、保護者は自分自身の子どもへの関わり方も省察していた。そこでは、単なる反省というよりもむしろ、無自覚であった自らの関わり方に気づく学びを得ており、本実践の場が保護者の、親として、人として学び続ける場となりうる可能性を示している。

以上により、保育参加及び「ともにラウンドテーブル」は、保護者が園の保育を理解するための行事にとどまらず、子どもの生活世界に身を置き、他の保護者や保育実践者と語り合うことを通して、子ども理解や自らの教育観を問い直す保護者参画型研修として機能していたと考えられる。多くの保護者は支援される対象としてだけではなく、学級や園の実践に身を置いて関わることで、子どもの育ちをとともに考える主体として学び合っていた。

③ 実践活動の実施上の課題

実践活動の実施上の課題として、以下の2点が挙げられる。1点目は、「ともにラウンドテーブル」において現代的な課題（生物多様性やデジタル活用など）が対話の話題になった際、情報として「教える」「教えられる」という非対称な立場を強める場になりがちであったということである。現代的な課題を多様な立場からともに考える場としては、保育参加後の「ともにラウンドテーブル」よりも、異なる立場の参加者が一つのテーマについて語り合う「おしゃべりひろば」の形式が適していた可能性がある。2点目は、「おしゃべりひろば」及び「教養講座」を実施する場合の園の構造的な課題である。両実践活動では担任教師が保育実践時間内に保護者との対話の場に参加する必要があるため、代替教師が存在することが前提となる。乳幼児教育施設においてさまざまな機能が求められる一方で、職員数は確保されにくい現状においてどのような工夫が可能であるのか、今後も検討が必要である。

2) 地域社会への波及可能性を探る実践活動により得られた知見

地域自治体指導主事及び地域園・連携園の実践者らとの対話から、「子ども・保護者・保育実践者がともに学び合う場」としての保護者参画型研修の意義と課題が明らかとなった。

① 「保護者」と保育実践者との関係性の前提の差異

各園において保育参加を実施する前の3月の対話では、乳幼児教育施設における保護者と保育実践者との関係性が、施設類型や地域によって多様に前提化されていることが自覚され、共有された。例えば、共働きの多い地域とそうでない地域では、「保護者」としての実践の捉えが異なることにより、園行事のデザインや位置づけは異なっていることが示された。

また、「子育て支援」という概念が、保護者関連の保育実践のあり方のみならず園運営の枠組みも規定している可能性が示唆された。「子育て」という営みは本来、あらゆる生活の中に内在されているものであるにもかかわらず、「支援」という語が付与されることで、「支援する側/される側」という非対称の関係が制度的に構築される。これにより、地域や組織が形成する文化によって、保護者に対しても「福祉」の視点が強くなること、「正しい子育て」や「望ましい関わり」など、「子育て」の価値観の正解が暗黙的に生成されること、「サービスする側/される側」という保護者の消費者としての側面が強まることにより、保育実践者の疲弊も強まることなどが話題に上がった。

② 保護者の主体的な関与が生まれやすい行事とは

保護者の保育実践への参加が義務や役割として課される場合には心理的負担を生むが、「できる時に、できる形で関わる」という柔軟な参加構造を構築することで、保護者の主体的な関与が生まれやすいことも対話において示された。掃除やボランティア、日常的な関わりといった参加は、保護者が教育の場に足を踏み入れるとっかかりとなり、保護者が園で起きていることを知り、子どもや実践者の世界に触れる契機となっていた。一方でこれらの参加には保育実践者側にも心理的負担が生じることが語られた。具体的には、ある園では初めて「保育者一日体験」の日を設け、希望する保護者が保育実践に参加する行事を設けた。園行事として実施するにあたっては、保護者が現場に入ってくることへの保育実践者の抵抗感もかなり強かったため、可能な範囲から始めることにしたという。今年度は保護者も戸惑いを見せながらも保育実践者の日々の営みや集団における子どもとの関わりの難しさについて言及があったことが報告された。

また「保育参加」という形態については、保護者が子どもの世界に「身を置く」という実践そのものの難しさも明らかになった。保護者は子どもから一緒に遊ぶことを求められても、実際には「見ている」「教える」立場に留まりやすく、「一緒に遊ぶ」という営みがどういうことなのか、一人の人として遊ぶということの難しさについて語られた。また子どもの安全や生活管理への関心から、大人の目が多いほど良いという見方が生じることもあり、子ども同士の関係の中で生まれる育ちをどのように共有するのが話題となった。この点は、子どもとの関係性によって子どもが表す姿が変わることを、保護者と保育実践者がともに捉え直す機会の必要性を示しており、事前に保育参加の意味や立ち位置を保護者と共有する必要性が示唆された。

③ 保育参加を市民としての実践として捉え直す

保育参加については、複数の園において父親の参加率の増加について語られた。乳幼児教育施設における保護者参画型研修は、母親のみを前提とした実践活動ではなく、多様な市民が園に関わる入口となり得ることも示唆された。保育実践者自身がこうした「子育て支援」という言葉が前提としてきた社会のありようを問い直し、子どもが生きる、育つ場に保護者が身を置くという市民的实践を再想像した上で、保護者参画型研修をどのようにデザインし、実施していくのかについて検討することが重要である。

以上により、本研究における保育参加及び「ともにラウンドテーブル」は、保護者が子どもの生活世界に身を置き、保育実践者や他の保護者との対話を通して、子ども理解や自らの教育観を捉え直す保護者参画型研修として機能する可能性が示された。そのためには、保護者を支援される存在や保育実践の補助者として位置づけるのではなく、異なる経験や視点をもつ学びの主体として迎える場の構成が必要である。また、こうした実践は、本園の方法の一つのモデルとして他園に適用するのではなく、各園の施設類型、地域性、保護者との関係性、組織文化などを踏まえながら、対話を通して構築していく必要があることが明らかになった。また、地域や施設類型を越えて実践者が集う対話の場は、互い

の異質性に触れることによって、自園で前提としてきた価値観や組織文化を自覚し、新たな保護者参画のあり方を想像する機会となり得ることが示唆された。

2. 今後の研究の見通し

(1) 今後の実践活動についての見通し

①本園における保育参加及び「ともにラウンドテーブル」の継続実施と検証

今後も、本園における保育参加及び「ともにラウンドテーブル」は継続して実施し、保護者・子ども・保育実践者がともに学び合う場としての実践をさらに深めていく。特に、保育参加を単発の行事としてではなく、保護者が子どもの生活世界に身を置き、その後の対話を通して子ども理解や教育観を揺さぶり再構築する学びの機会として位置づけ、実践と省察の循環を意識していきたい。

②地域園や連携園との対話の場の構築

引き続きオンラインや現地での対話及び意見交換を継続する。各園の施設類型、地域性、保護者との関係性、行事の歴史には違いがあるため、一つのモデルをそのまま共有するのではなく、それぞれの園の文脈に即して、保護者参画型研修の意味や可能性をともに探っていく。

③対話を支える実践者の力量形成

「ともにラウンドテーブル」を支えるには、対話の場をひらき、参加者の声がきかれ、意味や価値の生成を促すファシリテーターとしての実践者の力量形成が重要となる。そのため、地域園や連携園と対面やオンラインで研修を実施し、安心して参加者が語れる場の作り方や問いの立て方、異なる意見をまとめずにそれぞれの学びに伴走する構えなどについて、実践者同士で学び合う機会を設けていく。

(2) 今後の検討事項

①PTA等保護者組織の変容と関連して

乳幼児教育施設における保護者との協働は、PTA等の保護者組織のあり方が変容しつつある現在だからこそ、改めて検討すべき課題である。従来のPTAにおける保護者の役割分担や義務的参加を前提とするのではなく、保育参加、おしゃべりひろば、教養講座、ボランティア活動など、様々な保護者参加行事を有機的に捉え直すことで、保護者も一人の市民としての実践として主体的に関わる回路を見出すことができるのではないかと考える。今後は、乳幼児教育施設が教育・福祉・文化をつなぐハブとして機能する可能性について、地域園や連携園、小学校や大学などとの対話や実践を通してさらに検討していきたい。

②従来の研修会を保護者にもひらく

乳幼児教育施設では限られた人員でさまざまな実践活動を行っている。実践者の持続可能性も考慮し、実践活動を増やすのではなく、これまで本園で企画実施してきた公開保育などの研修について、現役保護者にも場をひらいていくことの意義や可能性、方法などを検討していく。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

○学会発表

鎌内菜穂・松田登紀・宍戸佳央理・辻岡美希(2026). ともにあるということ(4)ーひらき、紡がれる実践の可能性ー. 日本保育学会第79回大会発表論文集, K-197-198.

○実践研究報告会

宍戸佳央理(2026). 社会的役割の<やわらぎ>から紡がれる「声」ー保護者とともに創る実践の新たな地平ー. 奈良女子大学附属幼稚園実践研究報告会「ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするーひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探るー」, 実践研究報告 2. https://www.nara-wu.ac.jp/kindergarten/_research/202601jissenkenkyu-report.pdf

○実践研究報告リーフレット

奈良女子大学附属幼稚園 幼年教育研究会(2026). ともに世界に意味を創り出す教育をデザインするーひらき、紡がれる実践の可能性を「痕跡」から探るー.

○実践研究論文

松田登紀・辻岡美希(2025). 乳幼児教育施設における「ケア」と「共創」の多層的实践ー保護者の市民としての「主体」が立ち現れる場の構築ー. 教育システム研究, 21, 101-111.